

県南部地域における4月どり加工・業務用寒玉系キャベツの作型開発

業務需要の多い寒玉系キャベツは、4月どりの作型では抽苔^{たい}により品質が低下しやすい。しかし新たに開発した県南部地域向けの作型では、晩抽性品種を9月上旬頃に定植することで、4月に業務用に適した収量・品質を確保できる。

内容

県南部（加西市）に位置する農業技術センターで、品種「青龍345」「YR503」（石井育種場）を2016～2018年度に栽培した。約30日間の128穴セルトレイ育苗とし、定植は3か年とも9月5、10、20日頃の3作型（2条千鳥植え、株間35cm、約4,760株/10a）とした。施肥窒素は計36～40kg/10aとし、土壌pHは6.0前後とほぼ適正であった。9月5日頃の定植では、いずれの年も4月中～下旬に安定して大玉が得られ、その際の総葉数（枯死脱落葉を含む）は「青龍345」で90枚以上、「YR503」で80枚以上であった（図1）。総葉数は定植から12月末まで（低温による花芽分化が生じにくい、葉数の増加期間）の積算温度と正の相関関係にあり（図2）、定植が遅れると年内に十

分な葉数を確保できず、球肥大が低下し、抽苔のリスクも高まると考えられた。

以上のことから、年間平均気温14.8℃前後（加西市と同等）の地域では、年内に十分な積算温度（約1,350℃以上）が得られる8月上旬播種、9月上旬定植とすることで（表）、端境期の4月に加工・業務用に適した約1,700～2,500gの大玉（収量8.1～11.9t/10a相当）が収穫可能と考えられた。

普及上の注意事項

両品種とも4月中に球外腋芽^{わき}が開花することが多いが、球品質は保たれる。「青龍345」は4月中旬までに大玉が得られ、「YR503」は芯の伸びが遅く4月下旬でも在圃性がよい。

大塩 哲視（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2423）

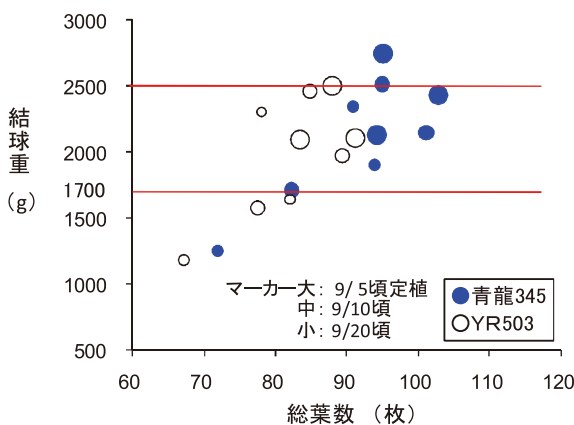


図1 収穫時の総葉数と結球重との関係

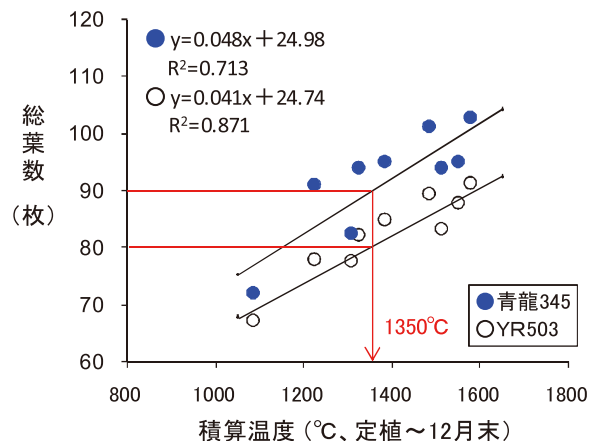


図2 年内積算温度と総葉数との関係

表 県南部地域を想定した作型表（年間平均気温14.8℃程度の地域*）

品種	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月		
									上	中	下
青龍345	○	△									
YR503	○	△									

本研究は農水省委託プロジェクト研究「広域・大規模生産に対応する業務・加工用作物品種の開発」（2014～2018）において実施した。

○播種 △定植 □収穫期 * 同15.5℃程度の温暖地（淡路地域など）では「YR503」を用い、8月15～20日頃に播種し、9月15～20日頃に定植する。